

景観フォーラム

巻頭言

日本に景観法が公布されたのが2004年6月18日である。従って、今年の6月で満20年経つことになるのだが、果たして日本の景観はこの20年間で良くなったのであろうか。確かに東洋の果て、この極東にある島を目指して、その観光客たるものは年々増加してはいる。彼らは何を求めてやってくるのだろうか。地の果てを見てみたいという気持ちだろうか、その求めるものはいろいろあると思うが、恐らく大陸にはない独特な空気感的なものが漂っているのではないだろうか。日本は6千余りの島々からなっている。本州を中心に北海道、四国そして九州という四つの島からなっており、それぞれの島はそれぞれの小さな島々を従えているという構造になっている。そしてその島々は殆どと言って山々からなっており、平野というものがほとんどなきに等しい。関東平野を筆頭にそれぞれの四つの大きな島には平野的なものを有してはいるが、ほとんど目に入るものは山また山が連なっている。日本の特徴としてまず第一番目に挙げられるのが、日本という国は徹底的に山国である。

山国に住むということはどういうことを意味するか。狭い地面を活用して食料を確保しなければならない。山にある山の食料を確保すると同時に、山から流れてくる川からは川の幸を、海の近くに住む輩は海の幸を確保する必要がある。人口が左程増殖しないであろう島国の社会は、平和が当たり前のことであつたらう。外来者が敵対的な行動をとらない限り、この島国は平穏そのものであつたのではないかと想像できる。

しかし、近代化は三百年のその平穏な空気を破らざるを得ない。その近代という概念が持つ社会的ダーウィニズムが社会のすべてに浸透することによって、Time is Moneyそして宇宙は無限であるという考え方を社会的常識にしてしまった。“より早く！より多く！より高く！”という標語が現代社会の真・善・美となる。我々が目にする現代社会に現れている“景観”たるものは、まさにこの表現そのものというものであろう。

ではなぜ大陸からの旅行者は日本に何を求めてやってくるのか。恐らく、近代化以前に残されている平穏な日本の空気感的なものを肌で感じているのではないだろうか。古くから住み着いている我々土着の日本人には気付かない近代化以前からある島国の平穏さ、そのようなものが大陸の人々の気持ちを動かしているのではないだろうか。これはもともとここにいる人間には理解できない空気感であり、海外に長く住んでいた人々が一様に感ずる島国にある安心感的なものではないだろうか。彼等はそれを求めてやってくるのであろう。

NPO 法人日本景観フォーラム理事長 齊藤全彦

<日本景観フォーラム 2024 年度年間スケジュール>

*2024 年度とは 2024 年 4 月 1 日～2025 年 3 月 31 日のことです。

4月23日(火) **第1回景観研究会** 総会・第1回理事会 (18:00～20:00) 於：JICA オフィス

5月12日(日) **第1回景観まちあるき**【アークヒルズ】

6月18日(火) **第2回景観研究会** (18:00～20:00) 於：JICA オフィス

7月13日(土) **第2回景観まちあるき**【秩父】

9月24日(火) **第3回景観研究会** (18:00～20:00) 於：JICA オフィス

10月19日(土) **第3回景観まちあるき**【下北沢】

11月19日(火) **第4回景観研究会** (18:00～20:00) 於：JICA オフィス

12月17日(火) **忘年会**【場所未定】

1月25日(土) **第4回景観まちあるき**【渋谷】

2月18日(火) **第5回景観研究会** (18:00～20:00) 於：JICA オフィス

3月22日(土) **第5回景観まちあるき**【大山】

■以上のスケジュールは、ご提案ですので随時皆様のご意見を反映してまいります。

<日本景観フォーラム 2023 年度 年間実績>

2023 年

4月24日(月) **第1回景観研究会** 総会・第1回理事会 (16:30～ オンライン会議)

5月30日(火) **第2回景観研究会** (16:30～ オンライン会議)

6月13日(火) **第1回景観まちあるき**【浦賀】

6月20日(火) **第3回景観研究会** 於：JICA 研究所 18:00～

9月30日(土) **第2回景観まちあるき**【品川東海道界限】

10月27日(金) **第3回景観まちあるき**【三ノ輪】

11月28日(火) **第4回景観研究会** 於：JICA 研究所 18:00～

12月19日(火) **忘年会** (東京、中野にて実施)

2024 年

1月19日(金) **第4回景観まちあるき**【逗子】

2月20日(火) **第5回景観研究会**・第2回理事会 於：JICA 研究所 18:00～

3月17日(日) **第5回景観まちあるき**【両国】

景観まち歩き 逗子

石見茂夫

(逗子周辺の町並み)

2024年1月19日(金曜日)、本年最初のまち歩きが湘南の逗子界隈で行われました。午前11時にJR横須賀線逗子駅に集合してまち歩きをスタートしました。

逗子市は神奈川県の大磯半島の西側の付け根にあり相模湾に面して位置しており、西は鎌倉市、東は葉山町となっていて湘南海岸の一部となっている。

1954年に市政を導入し本年が市政70周年に成り、人口は約56,000人で首都圏のベッドタウンとなっている。



駅の南口側は市役所や図書館、市民交流センター等の公共施設が有る密集した旧市街地で道も狭く雑然とした景観である。一方山側の北側は駅のすぐ近くまで山が迫っていて自然が残っている。更にこの山の北側には大きな住宅団地がいくつも造成されていますが、山上に有るので市街地からは見渡すことはできない。

逗子市はJR横須賀線で東京駅から1時間数分と利便性が良く古くから東京のベッドタウンとして人気の有る地域である。逗子駅周辺の市街地から逗子海岸まで徒歩でも行くことができるので、リゾート感覚で住めるエリアとなり多くの海好きの人達が移住しています。

また、横須賀線の車庫があるので逗子駅までは電車の本数も多く、始発の電車や終点の横須賀から来る電車も逗子駅で増結車両があり通勤が楽に行えるのも人気のようである。

更にJR逗子駅近くには京浜急行の逗子・葉山駅が有り、横浜や品川方面に通じているのも人気のようである。

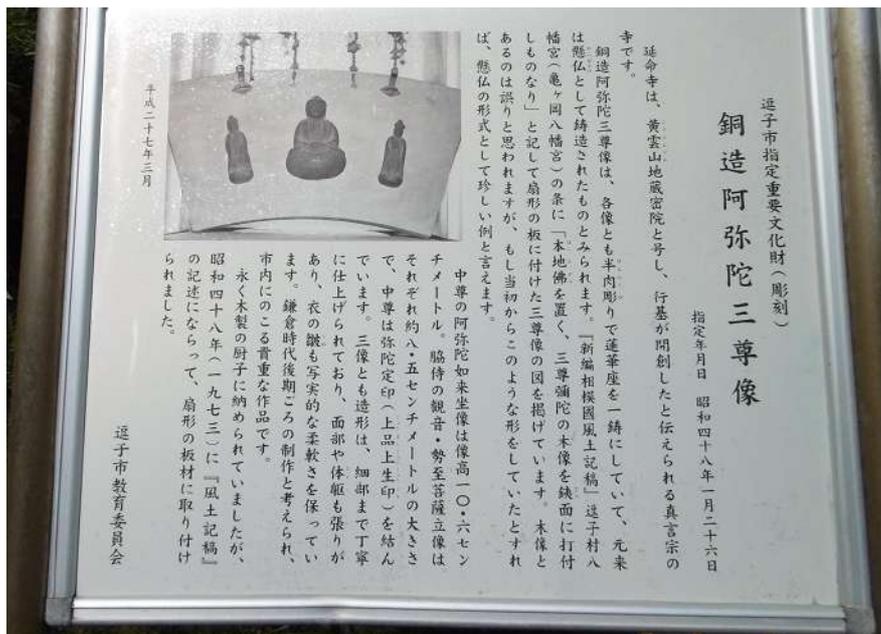


(黄雲山 延命寺)

昼食の後まち歩きをスタートして、最初に田越川の脇にある黄雲山延命寺を訪れました。

延命寺は高野山真言宗のお寺で本山は和歌山県の高野山金剛峯寺で、平安時代に弘法大師（空海）が当地に立ち寄り地蔵尊の厨子を設立したことから、この地を「厨子」と呼ぶように成り現在の地名「逗子」の地名の発祥となりました。

弘法大師の誕生1200年を記念して昭和52年に新本堂が落慶した時から、「逗子大師」の称号を合わせて使うようになりました。



(逗子・田越川沿いの住宅地)

逗子海岸へ向かうのに逗子駅近くの市役所や文化プラザホール・図書館・市民交流センター等の公共施設エリアから田越川沿いの住宅地を歩いた。

田越川は横須賀市との市境の山の稜線に近い沼間・池子地区を源とした約3Kmの短い二級河川である。逗子の市街地を東西に貫いて逗子海岸南端の国道135号線の渚橋で相模湾に流れ出ている。

川沿いは閑静な住宅地に成っていて川の左岸側は桜山の山地が迫り近くには、逗子景勝10選の蘆花記念公園や国指定史跡の長柄桜山古墳群がある。

田越川に架かる「仲町橋」は赤い欄干に烏帽子が付いた和風の橋であるが、直ぐ前には神社ではなく日本キリスト教団の逗子教会がある。

蘆花記念公園の広場の脇には、三浦半島が隆起した時に現れた地盤が表れている場所が多く見られた。



(逗子海岸 太陽の季節記念碑)

逗子海岸は逗子駅から直線距離で600m程にある逗子湾に面した約1Kmの遠浅の海岸で、夏には多くの海水浴客で賑わう湘南でも人気の海水浴場である。温暖な気候なので夏以外も水上スポーツや散策する人達で通年利用されています。海岸の背後には国道134号線(湘南道路)がバイパスのように海岸と並行して通っているので、市街地からはアンダーパスを通過して海岸に出るように成っている。

この道路は1986年までは湘南道路逗子区間として有料道路となっていた。

永年逗子市に住んで居た作家で元東京都知事だった石原慎太郎さんの逗子市のファンや各種団体が協力して、2005年に逗子海岸の葉山寄り渚橋のもとに石原慎太郎氏の芥川賞受賞50周年の文学記念碑「太陽の季節」作られました。記念碑は岡本太郎さんの「若い太陽」のオブジェと共に石原慎太郎さんの文字が刻まれて逗子海岸の新しい名所となっている。



(新宿稻荷神社)

新宿稻荷神社は逗子海岸の西端から100m程内陸に入った崖地に位置している。

伏見稻荷を祀る神社で逗子市の新宿地区の鎮守と成っている。石段の踊り場の石製手水鉢に元治二年と書かれてが、確かな創建の時期は不明である。

社殿の奥にある岩窟の中に白木造りの本殿が有ります。神社から海岸に面する山の際に二十数基の「横穴墓」があり古墳時代(七~八世紀)の形態を示すもので、人骨、直刀、玉類、銅釧(腕輪)などの祭祀用装身具や、土師器、須恵器が出土している。



(披露山公園)

披露山公園は逗子市が管理する都市公園（風致公園）で、逗子海岸の西側にある披露山（標高92m）を中心に5.8ヘクタールの面積である。公園には小動物の動物園、展望台、レストハウス、遊具等が設置されている。

展望台からは相模湾の逗子湾をはじめ遠方には箱根や伊豆半島等が望め、天気良ければ富士山も見ることが出来る。

第二次世界大戦の時には、この展望の良い高台は海軍の小坪高角砲台として高角砲や高射砲が設置されていた。鉄筋コンクリート製の指揮所跡は現在はレストハウス、砲座跡には猿舎と展望台や花壇として利用されている。



(披露山庭園住宅)



披露山庭園住宅は逗子市西部の高台に位置し相模湾越しの西側に富士山、箱根連山、伊豆の天城連山、江の島、南に大島の眺望がある高台の披露山公園の隣接地にある。

風光明媚な自然環境に恵まれた緑豊かな環境に包まれた住宅地となっている。

1968年に民間不動産開発会社（TBS興産）によって逗子市小坪の標高約80mの小坪山を中心に造成が行われ、1971年から分譲が始まり現在は終了している。

このエリアは第1種及び第4種風致地区内にあり、風致地区にふさわしい景観や環境に配慮した開発が行われた。隣接地には逗子景勝100選並びに県の景勝50選に指定されている景勝地の披露山公園がある。

開発にあたっては厳しい法規制の条件を満たすことにより、国内では例が無いような良好な住宅地として計画された。開発計画の概要は、1区画の住宅面積は1,000平方メートル以上、建ぺい率は20%以下、高さ8m以下の建築協定を付けて販売された。地区内には共同溝を作り電線地中化や共同浄化槽を設置しての污水集中処理施設を作り景観に十分な配慮がされている。

また造成地は芝生や植栽で覆われ裸地が無い様な緑化計画がされ、私有地以外の道路周辺には植栽帯を作り庭園も整備されています。

開発当時から披露山庭園住宅は日本で一番の環境や景観と評価されて、全国の住宅開発地の良い見本とされて来ました。

「披露山庭園住宅地」の名称のもとなる「披露山」の由来は、源頼朝がこの山で御家人たちを集めて、手柄者や全国から献上された貢ぎ物をこの地で披露したことからこの山の名がついたとの説があります。鎌倉時代には幕府の要人が好んでこの披露山周辺を別荘地として利用していたようである。



披露山庭園住宅から小坪集落に下りる狭い道、道は急傾斜で崖と住宅が入り込んでいて歩行には注意が必要である。

5分ほどの歩行時間で、庭園住宅とはまったく別の世界に入ったようなギャップを感じる。

(逗子マリーナ)



逗子マリーナは、西武流通グループ（後のセゾングループ）によって地中海のリゾート地をイメージした街づくりとマリーナの建設が行われた。敷地は鎌倉市材木座と隣接する逗子市小坪の岩礁を、鎌倉市の十二所にある鎌倉霊園造成工事の残土を用いて埋め立てることで造成されており、1971年に開設された。

開設後の1970年代半ばから1980年にかけて合計9棟、1,200戸以上のマンションが建設されて分譲されました。逗子市のインフラ公共施設の対応が出来ない事から、通常の住居用マンションとしてではなく厚生用リゾートマンションとして分譲されました。

所在地は東京都心から鉄道や車で約1時間と比較的近距離にある海岸リゾート地として注目を集めました。湘南海岸の海に囲まれ沢山のヤシの木が植栽された街路と地中海風の建築デザインによるマンションが国内に無い雰囲気から人気を博しました。日本とは思えない海外を思わせる風景となり度々ドラマや映画、CM等の撮影に使用されています。

現在の逗子マリーナはリビエラ逗子マリーナとして運営されています。敷地内にはリゾートマンションの他、マリーナ（ヨットハーバー）、ホテル、レストラン、結婚式場等施設が作られています。

多くのマンションからは相模湾内の葉山町や江の島、遠く富士山が見渡せる。マンションは分譲された住戸のほか、会員制の「逗子マリーナオーナーズ」もある。

ヨットハーバーには、海上係留と陸上艇置併せて約280艇のクルーザー及びボート、ヨットを置く事が出来る他、ビジター用バースもありメンテナンスも行っている。





掲載写真の一部は、逗子市・披露山庭園住宅・逗子マリーナのHPから転用しました。

THE TOKYO TOILET 今、公共トイレが面白い（上）

豊村泰彦



人々が快適に暮らすのに公共施設の充実は欠かせないが、その中で公共トイレの存在を忘れてはいけない。仕事で移動するときも散歩するときも必要になるのはトイレだ。私たちはきれいで快適に使えるトイレを常に欲している。トイレ自体が利用者から愛され喜んで利用できるトイレがあればまち歩きはもっと楽しくなる。

そういう環境が身近で整備されつつあるということを最近知った。それも一本の映画を見てからである。その映画はヴィム・ヴェンダースが監督の「Perfect days」。ストーリーは、東京・渋谷でトイレ清掃員として働く男（役所広司）が、朝は定時に起き、決められた清掃の仕事をこなし、夜はビールを飲んで、単行本を読みながら寝ると同じことの繰り返しである。しかしながら彼が掃除を担当しているトイレはどれも風変わりなで、なぜか人を新しい気持ちにさせる。そんな日々中で、現実に思いがけない出来事に出会うのである。

この映画の中で、清掃員が清掃するトイレは一つ一つが個性的で、かつその場所に溶け込んで風景の一部になっている。トイレというのは大体どれも同じ形をしているという観念にとらわれていたが、トイレにもいろいろなタイプがあることやトイレも清潔で親しみのあることが大事だということが分かり、公共トイレに非常に興味がわいた。

この映画で取り上げられたトイレは「THE TOKYO TOILET」といって、公共のトイレをこれまでのトイレと違ったものに生まれ変わらせて公衆トイレのイメージそのものを変えてしまおうということで始まったプロジェクトであったのだ。

わが国での初めての公共トイレは、1879年に横浜に誕生した洋風な公衆トイレだったが、それから約140年余を経て、日本の多くの公共トイレは暗い、汚い、臭い、怖いといった理由で利用者が限られている。

そこで、「THE TOKYO TOILET」は、性別、年齢、障害を問わず、誰もが快適に使用できる公共トイレに変えていこうと日本財団、渋谷区などが中心になって取り組んだ。それぞれのトイレのデザインには、世界で活躍する16人の建築家やデザイナーが参画し、2023年3月に、渋谷区17カ所すべてのトイレの設置を完了した。

また、このプロジェクトでは、誰もが気持ちよくトイレを利用できるよう日本財団、渋谷区、一般財団法人渋谷区観光協会の三者で、定期清掃メンテナンスにも力を入れ、特にトイレの維持管理のプロフェッショナルである「トイレ診断士」による診断を受けながら、メンテナンスを向上させているという。

そこで、本稿では、この「THE TOKYO TOILET」によって誕生した渋谷区内の公共トイレ17か所のトイレを今回と次回の2回に分けて紹介する。

■恵比寿東公園トイレ

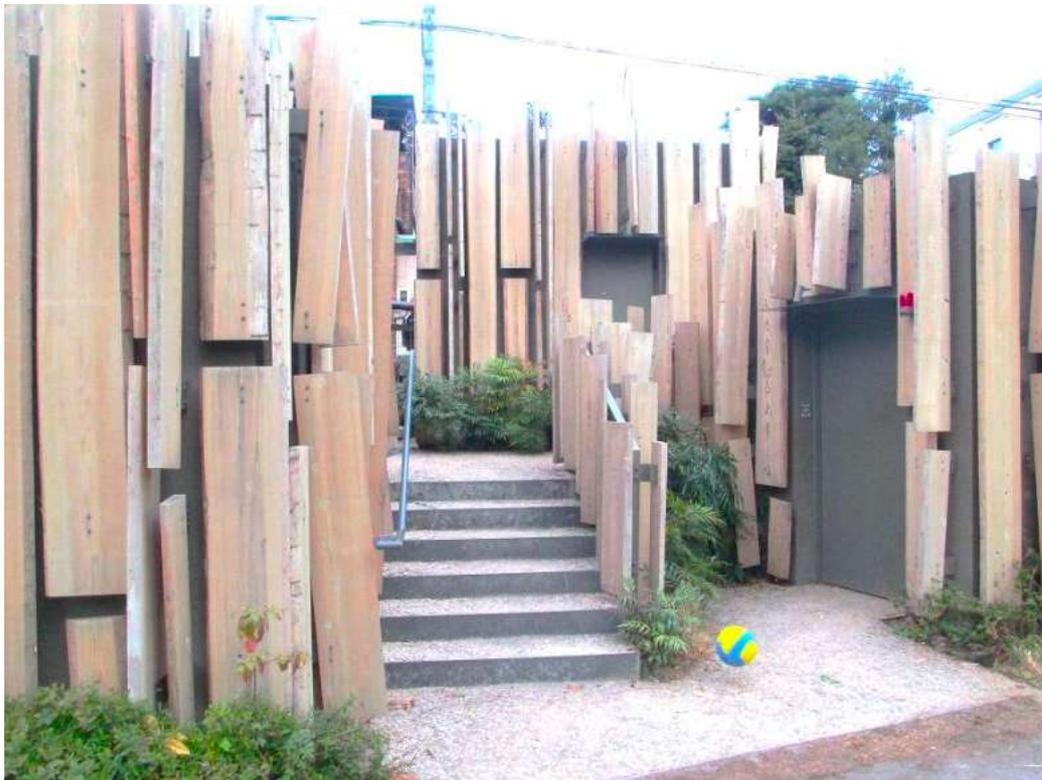
槇文彦（建築家）



恵比寿東公園は、緑豊かな児童遊園で「タコ公園」の愛称で知られる。子供の遊具としてタコの滑り台があったり、遊具もそろっていて近所の子供たちにとっても親しまれている。普段から近隣の人々に親しまれている公園のイメージに配慮してトイレのイメージはイカにしたという。児童公園にしては立派なトイレと思われたが、公園は地域の人や通勤してくるビジネスマンの休憩所でもあり、そういう意味で、単なる児童公園ではなく多様な人が利用する公共空間になっている。外観は白を基調にガラス面に薄い緑を配しているところが非常にさわやかで、公園全体の景観をアップさせていると思う。

■鍋島松濤公園トイレ

隈研吾（建築家）



初めて来た人がここを公衆トイレと見分けることは難しいと思う。庭園の一部とか、建設中の公園施設と見る人もいるだろう。よくよく見れば杉板を重ねて作った小屋で、表示を見てようやくトイレであることが判明する。このトイレは児童公園の一部になのであるが、周囲に樹木が多いことから森の小道をイメージし、杉板の重ねてある一帯は集落のような「トイレ村」なのだろう。鍋島松濤公園は都会の中であって、大きな池を囲んで巨大な樹木がそれを囲む都会のオアシスで、都内でも有数なハイグレードな場所。すぐ近くには昭和時代の巨匠白井晟一が設計した名建築と言われる松濤美術館がある。そのような場所だけに森をテーマとする隈研吾のトイレが今後地域にどう馴染んでいくのだろうか。

■神宮通公園トイレ

安藤忠雄(建築家)



神宮通公園トイレは、渋谷駅から明治通りを北に歩いていき、宮下公園を越えたあたりに小さな公園がある。公園の木々の緑の中に椀形トイレがある。従来のトイレは公園の端や隅ににあるものだが、このトイレは公園の真ん中にドンと鎮座している。このトイレのために公園はあるのだという傲慢さも感じられる。公共トイレという機能だけに収まらない、都市のシンボル施設としての意味を持たせるつもりだったという。この施設を「あまやどり」と名付けたようだが、このトイレは、円形平面の棟から、屋根庇が大きくせりだして縁側をつくる造形となっている。外壁は風と光を通す、たて格子とし、円形の壁に沿ってぐるりと通り抜けられるように2方向出入口とした。人がその下で雨宿りをしたり、夏の強い日差しを避けたりするなどトイレの使用にとどまらない多様な利用を期待しているようだ。

■代々木八幡公衆トイレ

伊東豊雄（建築家）



山手通り沿いにある代々木八幡宮は、東京という大都会にあっても緑豊かな境内を持ち、パワースポットとして親しまれている神社、その参道にあたる階段の上り口に森から生まれた3本のキノコのように代々木八幡公衆トイレは建っている。建物はキノコ型をした円柱形を基本とし、トイレの建物の表面は、地層のようなグラデーションの模様をしている。この柄は、色が異なる丸いタイルを外壁に張って構成しているそうだ。トイレは3つの個室型トイレから成るが、それぞれを分散させることで回遊性がとられ、死角をなくすことで防犯性を高めているそうだ。また、各個室の広さを豊かにとり、従来は多目的トイレに集約していた高齢者や子供連れのための機能も男女の個室へと分散し、パブリックなトイレとして多様な利用者に利用できるようになっている。

■はるのおがわコミュニティーパークトイレ 坂 茂 (建築家)



■代々木深町小公園トイレ 坂 茂 (建築家)



子供がボール遊びができる広々とした公園、はるのおがわコミュニティーパークと代々木深町小公園のそれぞれの広場の端に、青や赤や黄色のカラフルな四角い箱型の建物が建っている。近くで見ると3つのガラスの箱である。これがトイレとは初めて来た人は気が付かないかもしれない。これらの建物は公共トイレの常識を壊しているともいえる。これらのトイレは外壁がガラス製なので、外側から中が見える。何のために透明にしたのかというと、一つは中が綺麗（クリーン）かどうか、もうひとつは中に誰も隠れていないかどうかをたしかめられるからである。もちろん鍵はついていて、中から鍵を閉めると不透明になるので外から中は全くのぞけなくなる。トイレに入る前に中が綺麗かどうか、誰もいないか確認でき、その2つの心配をチェックすることができるのである。さらにこの2つのトイレは魅力的な仕掛けがある。この建物全体が夜には発光し、行灯のように公園を照らすのである。

■恵比寿公園トイレ 片山正通（インテリアデザイナー）



公衆トイレというよりは公園のオブジェとして鑑賞に値するトイレである。使いやすさと同時に、遊び的要素も同じくらいのレベルで入ってくる。コンクリートの壁によって3つの空間を作り、迷宮にいるようなわくわく感を持たせる。壁の組み合わせによっては迷路に入り込むような緊張感を抱くようにしたのはまさに隠れ家を欲する大人の遊具と言ってもよいだろう。この「THE TOKYO TOILET」に参画している設計者はほとんどが建築家であるが、やはりデザイナーが設計するのと建築家が設計するのとは違うものができるつくづく感じる。建築はやはり、使用目的の明確化が第一となりそれにある意味束縛される部分はある。トイレはトイレなのである。ところがその点デザイナーは意識的に逸脱できるし自由になれる。トイレは遊具でもよいのであるというような。どちらがよいとか悪いとかは言えない。最終的にはプロジェクトのリーダーがOKを出したのであるから。これでいいのだろう。

■西原一丁目公園トイレ

坂倉竹之助（建築家）



このトイレのある西原一丁目トイレは住宅街の中の緑道の途中にあり、駅からも少し距離がある小さな公園である。普段の利用者はそれほど多くないかもしれない。しかし、対象が少なくても重要なトイレはある。ここには外部からの観光的訪問もなく日常が継続される。当たり前なのが当たり前存在していなければならない、それでいて、地域の人に親しまれなければならない。設計者は公衆トイレとして最もオーソドックスな形状を選んだ。そうになると色が問題となる。建物の色を白とするのは清潔感を出そうとする公衆トイレの常道。となるとドアや色で存在感を出すことになるが、鮮やかなグリーンを選択したのは最善の選択だと思う。制作者も「みんなが利用したいと思うトイレを創出することが、この敷地では重要と考える」と言っているが、建築家の良心を見た思いだ。

■笹塚緑道公衆トイレ

小林純子（建築家）



京王線笹塚駅の近くの高架線の下に黄色い大庇の円形の大庇と高さの異なる幾本かの円筒が集まる不思議な容貌のトイレ。円筒は耐候性鋼板パネル構造にして、壁には動物の絵が描かれてあったり、子供から大人まで親しみやすさを感じる外形だ。トイレのコンセプトは「まちあかりのトイレ」。外壁の耐候性鋼板パネルが強度と風合いを保ち、まるで土地に根を張ったような存在感があり、夜にはトイレの屋根に浮かぶ黄色い大庇からの光がまちを照らす。開口部は広くとり、重厚さを感じるが、中は明るく清潔感あふれ、安全性にも配慮している。設計者の小林氏はこれまでに約250件もの公共トイレプロジェクトに関わってきた実績がある。まさに日本の公共トイレ設計の第一人者だ。一般社団法人日本トイレ協会会長も務めている。

（次号に続く）

<LFJブックレビュー 83>

『もっと知りたい本阿弥光悦 生涯と作品』玉蟲敏子・内田篤呉・赤沼多佳著

東京美術 2015 年刊

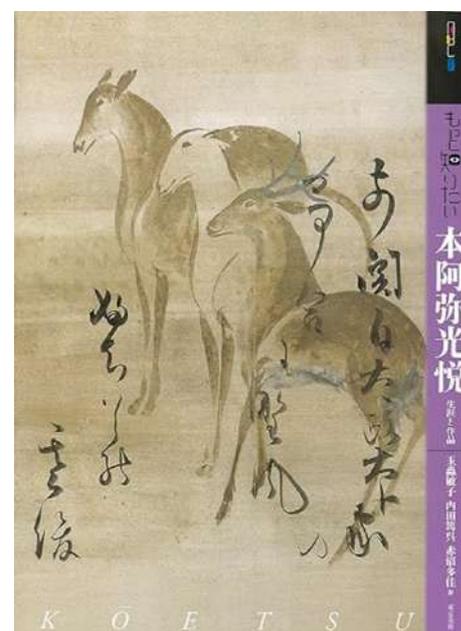
斉藤全彦

本阿弥光悦（1558-1637）という人物を一言で称したら何と言ったら相応しいか。現代風に言えば“総合芸術家”と称したらの確な呼称表現に当るだろうか。なんとなく、しっくりしないものが残る。何せ、豊臣秀吉（1537-1598）から徳川家康（1543-1616）の時代を駆け抜けた人物であり、家康からは鷹峯（たかがみね）という京都北部に芸術村となる地所を与えられている。日本の歴史上初めての芸術家だけが活躍できる自治集団の場が本阿弥光悦という一人の人物にゆだねられ、三つの寺院を含む鷹峯光悦町の町割り図が残されており、活気のある景観が想像できる。

まず、本阿弥家はもともと刀剣の目利きを家業にしてきた。そこでは、鍔や金象嵌などの職人や茶の湯釜などの金工職人などとの交流が生まれる。さらに、漆芸に関しては蒔絵師などとの深い関係が生まれる。即ち、総合芸術の下地には事欠かない境遇であったと言えよう。そして、本阿弥家は刀にかかわる家業を営みながら上流武家にかかわりを持ち、江戸時代を通じ狂歌などの芸文界でも名の知れた人物を輩出している多芸な一族であった。

光悦の才能は、先ず、能書家として知られている。本阿弥一族の集団が法華経を信ずる集団という関係から、光悦は青蓮院尊朝法親王から書法を伝授されたと言われる（本阿弥家の菩提寺である京都の本法寺には光悦の書跡関連作品が伝わっている）。扁額などにも光悦の書跡は残ってはいるが、光悦がその名を知らしめたのが、光悦の書と宗達の画のコラボレーションであろう。画面のなかに大胆に書を書き込むというやり方は、それまでにない方法であったと言えよう。宗達との共作に於いて『伊勢物語』の出版事業が成功し、また「光悦謡本」が大いに光悦の名を世に知らしめたと言えよう。『鶴下絵三十六歌仙和歌巻』などはリズムカルな書と絵の絶妙な調和を呈している。絵と書の調和はこれまでになかった新しい美というものを創出するものであった。さて、光悦の蒔絵であるが、古典文学に取材し、蓋を高く盛り上げた奇抜な形態や鮑貝や鉛の金具を用いた斬新な意匠にその特徴がある。そして、この光悦蒔絵は元禄時代に尾形光琳によって継承されている。また、光悦の総合芸術が花開いたものとして茶碗の世界を忘れてはならないであろう。しかし、光悦の茶碗はあくまでも素人の手すさびであった。ただ、光悦の心の中で育まれてきた茶の湯がおのずから茶碗の形となり、光悦の心情を今日に伝えているのである。

さて、本阿弥光悦（1558-1637）と千利休（1522-1591）の関係を考えるのも興味深い。利休は光悦の36歳年長であった。光悦が江戸時代の始まりまで生きたのとは異なり、利休は秀吉に殺されたので江戸時代には関係していない。しかし、文化の影響という観点からして簡単にはそうとは言えないだろう。少なくとも、利休と光悦は33年という同時代を生きたのであるからして、何らかの影響があったのではないだろうか。少なくとも、後代にあたる光悦には利休の美の神髄は継承されていたのではあるまいか。光悦33歳の時に利休は秀吉から死を宣告されたのであるから。それを光悦が知らなかったはずはあるまい。（斉藤全彦）



〒150-0031
東京都渋谷区桜丘町 14-5-502
TEL : 03(3780)3814
FAX : 03(6379)6681
E-mail : info@keikan-forum.com
URL : <https://www.keikan-forum.org>

